

1. 調査での気づき

身近にいるけれどついつい邪見にしていまいがちな昆虫、私自身ももともとそこまで得意ではなかったが、生物の教員としてはやはりなんとか興味を持って観察してもらいたい。そんな風に悩んでいた中、本調査プログラムに参加した。本調査プログラムで予定されていた昆虫採集には天気の関係で行くことがかなわなかったが、すでに採集済みの昆虫を分類するというところを行った。生き物を分類するためにはその生物をよく観察し、特徴をとらえる必要がある。また、分類するためにはその昆虫の分類に関する知識が必要である。膨大な種類の昆虫を分類するのは非常に大変な作業だったが、昆虫をよく観察し自分で調べようとする意欲を掻き立てる効果的な方法だと実感した。分類、観察を通して昆虫の魅力に徐々に気づいていく自分がいた。



2. 調査内容で得た知識を応用した授業実施の概要

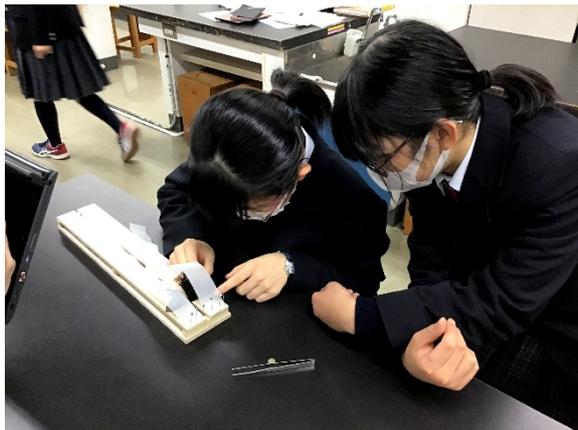
調査後はすでに晩秋であり、新たに捕虫トラップを設置するような費用も場所もなかったため、自身が春先に沖縄で採集したチョウ類の分類と標本づくりを行った。対象生徒は自身の担当する中学1年生の希望者と高校2年生とした。授業前に冷凍していたチョウを軟化しておき、そのチョウの分類を説明した。同時にチョウの食草から当時の環境や生物を知ることができるという標本を残す意義について説明した。そして班ごとにチョウを展翅版に固定した。1月現在、まだ乾燥中であるが2月ころには標本箱に飾る予定である。

3. 授業実施時の子供たちの反応や感想

展翅版が自作だったこともあり、うまくできない生徒や不器用で翅を傷つけてしまう生徒もいたが、丁寧に標本づくりに取り組んでいた。また、チョウ類だからということもあるが「綺麗」という声が多かった。授業内で説明した分類や食草との関係・標本を残す意義なども生徒は興味深く聞いていた。

4. 授業実施してみた先生自身の感想

調査後は秋～冬になってしまったので、授業がすでに個人的に採集していたチョウ類だけの分類・標本づくりになってしまったのが非常に残念である。それでもやはり生徒たちはよく観察したことも標本をつくったこともなかつたため、楽しそうに集中して取り組んでいた。来年もできますか？と言われたときは実施してよかったと思った。春～夏にかけて生徒とともに昆虫を採集し、乾燥したものを分類・標本にしてみたいと思った。



5. 自身の体験を語ることによる子どもたちへの学びへの影響について一言

教員自身も専門外のことは学び、知識を得ていく必要がある。その姿勢や自然を観察する視点を生徒に伝えることで、生徒は自ら観察し学ぶようになっていく。今回のチョウ類の標本づくりも比較的材料をそろえやすく、簡単に行うことができる。生徒は私がチョウを渡すと自然に標本づくりを始めていた。「他のチョウは？」「来年もできますか？」といった声も多く聞かれた。生徒が自主的に学んでいくよう誘導するために、やはり教員自身が学ぶ体験を大事にする必要があると思う。